合成語に見られる音素交替

田 村 すゞ子

昨年 (1970 年) の日本語教育公開講座でわたくしは「言語分析における職能の取り上げ方」という題でお話ししたが (これは『講座日本語教育』第 7 分冊(早稲田大学語学教育研究所, 1971)に収録されている), その序論で次のように述べた。「いわゆる syntax だけでは文法全体の半分にも足りない。言語形式の構成要素となり得る材料としての個々の形式を綿密に調べて記述する必要がある。」つまり,構文法上の規則ばかりいくら明らかにしたとしても, 一つ一つの形式の形, 意味, 職能を明らかにしなければ片手落ちだということである。片手落ちどころか, 個々の形式の認定 identification ができなければ syntax もわからないわけである。そして個々の形式を認定して記述するためには, 実際に形式の性質を調べる必要があること, 調べてはじめてわかることがたくさんあるのだということを話した。そして昨年 (1970) は特に職能の面をどのように取り上げたらよいか, そうすることによってどういうことが明らかになるかという問題を中心にお話ししたわけである。

その中で形の面の問題にもちょっと言及した。たとえばハコ《箱》という形式は単独ではハコだが, 前に何かついて「チョーク箱」「おもちゃ箱」「道具箱」「木箱」「ボール箱」「あき箱」のような合成語になるとバコとなる。そしてこれと同じ h と b の交替はヒ→ビ, フネ→ブネ, ホシ→ボシその他数多くの形式にも見られるから, ハコだけについて記述するのではなく, それらの形式に共通の現象として抜き出してまとめて記述するのが賢明である。しかし語頭に h を持っていてもそれが b にならない形

式もあるから，ハコという形式が合成語の後部要素となった場合にはh→bという規則が当てはまる形式であるということは，ハコの記述の中に含まれるべきものである。昨年はこの程度の言及を行なったのであるが，今回はこの形の面の問題をややくわしく取り上げる。

たとえばトケイの前にウデ，ハシラ，オク，カケル，メ(ヲ)サマスなどがついて合成語になるとトケイの頭のtがdに変わる：ウデドケイ，ハシラドケイ，オキドケイ，カケドケイ，メザマシドケイ。同様にクツの前にカワ，ウンドー，シンシ，フジン，ナガ゜(イ)がついて合成語になるとクツの頭のkがŋに変わる：カワグ゜ツ，ウンドーグ゜ツ，シンシグ゜ツ，フジングツ，ナガグ゜ツ。「...ドケイ」「...グ゜ツ」という合成語の中では，トケイ，クツは常にドケイ，グツとなって実現する。このように，形式が合成語の後部要素となったときにその頭のhがbになり，tがdになり，kがŋになる(くわしく言うとkがgとなりさらにこのgが，kから来たのではないもともとのgといっしょに，機械的にŋになると解釈される)という種類の音素交替は，ふつう「連濁」と呼ばれている。

合成語ができるときにそのつなぎ目の部分に起こる音素交替は連濁以外にもある。たとえばアメ《雨》とオト，ミズ，モルなどが結合して合成語ができるときは，アメの末尾のeがaに変わる：アマオト，アマミズ，アマモリ。このような，前部要素末尾の母音の交替も，かなり広く見られる現象である。こういう母音交替と連濁とが同時に起こる場合もめずらしくはない。たとえばアマグ゜ツ，アマガ゜サ，アマグ゜モ，アマガ゜エル，アマド，アマゴイ。

アメ《雨》が合成語の前部要素となった場合には必ずe→aという交替を受けるかというとそうとも限らない。たとえばアメフリ，アメツズキ，アメツユのようにアマにならない場合もたくさんある。

合成語に見られる音素交替としてはこのほかまだウデとフシが結合してウデップシになり，イジメルとコが結合してイジメッコになるといったような，促音のはいる現象もある。また数詞と名詞あるいはいわゆる助数詞

との結合においては(この場合は合成というよりむしろ接合である場合も多いが)特有の交替規則が作用し，たとえば

イツパイ	イッピキ	イッペン	イッポン
ニ　ハイ	ニ　ヒキ	ニ　ヘン	ニ　ホン
サンバイ	サンビキ	サンベン	サンボン

のような整然とした規則的な交替が見られる。

このように，取り上げればおもしろい問題がたくさんあるけれども，全部には手がまわらないので，今回は主として連濁の問題を取り上げ，あとでちょっと母音交替の問題にもふれたいと思う。

資料は主として金田一春彦監修(秋永一枝編)『明解日本語アクセント辞典』(三省堂)から取った。これは意味の記述その他余分のものを含まずまた他方言もまぜず，現代東京方言の発音だけを示したものなので，今度の目的にはうってつけだったからである。その項目の中から当面の問題に関係のあるものをカードにとった。時間の関係で1971年7月現在でpp. 1—100, 全体(926ページ)の1割強の資料を実際に使用した。(この資料以外の例は右肩に*をつけてこれを示す。)

これから，この資料をどのように扱って，いかにして結論に導くかという，研究方法の実際をお話ししようと思う。結論としての規則だけをあげたのでは，あまり役に立たないのではないかと思うのである。たとえば「アトクサレとアトグサレとはどちらが正しいですか」というようなことを聞こうと思っておいでになった方は当てがはずれたような感じをお持ちになるかもしれないが，そういう方には「字引きをごらんください」と申し上げるほかはない。しかし調べ方や考え方をお話しすれば今後ご自身で何か(音素交替に限らずほかの問題でも)お調べになりお考えになるのにお役に立つことがあるのではないかと思うのである。それになんと言っても結論に至る過程というものはおもしろいもので，いろいろな問題が出て来，その中には最後まで解決されずに残る問題もあるので，そういうことを知っておいていただくのいもいのではないかと思うわけである。

連　濁

「連濁」とよばれる現象は簡単に言うと次のようなことである。

単独では	例	合成語の後部要素になると	例
k	クモ	g→ŋ	アマグモ
s	セミ	z	アブラゼミ
c	ツル	z	イモズル
t	ト	d	アマド
h	ハコ	b	アキバコ

§1. 資料集め

そこで上記の辞典の項目から，単独で k, s, c, t, h に始まる語が合成語の後部要素となっているものを，連濁しているものも連濁していないものもすべて拾った。ただし合成語の後部要素が和語であるか，あるいは漢語であっても単語として存在するものに限定した。いわゆる漢字熟語も合成語には違いないが，漢字熟語の構成法は和語の合成語の構成法とはずいぶん違っており，音素交替規則も違うから，別途に扱う必要がある。今回はそういうものは除外した。また何かにスルがついてできた合成語がしばしば...ズル，...ジルなどとなることがあるが，これにも別の規則が働いている。数詞と名詞あるいは助数詞の結合の際に見られる音素交替も，違った規則に支配されており，これについては別途に調べる予定がある。さらにクログロ，サキザキのような反復においても連濁の現象は見られるが，ここにもふつうの合成の場合とは別の規則が働いている。これらは(資料は取ったが)今回の議論の対象からははずす。従って今回はこういったものを除いたごく一般的な，ふつうの合成語だけを扱うわけである。

§2. 見当をつける

資料を集めるうちにいろいろ見当がついてきた。

(a) 後部要素の音素的な形が連濁の有無に大きく関係している。クギ°，カゼ，カド，タバのように第二音節に濁音を持つものはいつも連濁せずに出てくる。そればかりでなく，どうも第三音節に濁音がある場合も連濁していないようである。

(b) 前部要素の音素的な形は連濁の有無に関係ないらしい。

(c) アクセントは直接関係がないらしい。

(d) 外来語は連濁しないらしい。

(e) 後部要素が漢語の場合は連濁しない例が多い。特に七，八のような漢数詞はいつも連濁していない。

(f) 連濁の起こっていない合成語は前部と後部の頭だけをとって結合した略語になっても連濁しないままであるらしい。たとえばウンテンキューシ→ウンキュー。

(g) 和語はなかなかよく連濁しているが，中には何回出て来ても常に清音のままというものがある。たとえばサキ《先》はいつもサキであってザキにはならない。

(h) 文法的構造が関係があるようだ。まずウエシタ，アチラコチラのように前後の要素が対等(並列，対立)の関係で並んでいる場合は連濁が起こらない。

(i) 後部要素が名詞の場合は非常によく連濁する。

(j) 「目的語＋他動詞」という構造の合成名詞では連濁が起こらない例も多いようだが，連濁の起こっている例もたくさんある。

(k) 「修飾語＋動詞」という構造の合成名詞では連濁の起こっている例が多いようだ。

『明解日本語アクセント辞典』の「アクセント習得の法則」(秋永一枝氏執筆)の中でもこの点に触れてある。すなわち“後部が動詞で，二拍以下の場合，前部が後部に修飾的，副詞的にかかるものは原則として平板型になる。”というアクセント交替規則が書いてある次に，“連濁する。”と書いてあって，アブラデリ，バイヤクズミなどの例が出ている。一方“後部が

前部を目的格とする他動詞(「…で…するもの・こと・ひと」のような意のある時)は，原則として前部の最後の拍まで高い。”とある次に“連濁しない。”とあり，アブラトリ，ボーシカケなどの例が出ている。『国語学辞典』(東京堂 1955) の「連濁」の項 (奥村三雄氏執筆) にも，“前部が後部の目的格の時は，副詞修飾格の時より連濁しがたい。風呂(フロ)タキ cf. 水ダキ。”とある。そしてこの記述はわたくしの感じとも合っていたのである。ところが実際にカードをとってみるとこのとおりではない例が次々に出て来るのである。これについてはあとで述べる。

このほか二，三の文法的条件についての見当がついてきた。そこでこんどはいま見当をつけたことを大ざっぱな仮説として，これに基づいて資料を分類してみた。昨年「言語分析における職能の取り上げ方」の中で強調したように，帰納法と演繹法とを併用するわけである。とにかく事実を調べないことには何もわからないわけだが，単に事実をくわしく調べデータを集めただけでは何も出て来ない。整理をする必要がある。整理をするためには仮説を立てるとよい。一応まあこんなところらしい，というくらいの仮説を立て，それをもとにして整理していき，その上でその仮説をどんどん修正していく。一方では新しい事実を調べデータを追加する。そうするとまたよりよい仮説が立てられる。そうしてだんだん修正を重ねていって，結論へ持っていくわけである。

§3. 資料の仮分類

音韻的条件，語彙的条件，文法的条件はたがいに交錯していて，一次元的分類はできないので，とりあえず次のような観点から分類した(第一次の仮分類から多少整理した段階をお目にかける)。

1. 後部要素が外来語のもの。
2. 後部要素が形態素一つだけの漢語のもの。
3. 後部要素が二つ以上の形態素から成る漢語(いわゆる熟語)のもの。
4. 後部要素が漢数詞のもの。

		第二音節以下に濁音のないもの		第二音節以下に濁音のあるもの	
		数	例	数	例
1.外来語	A清	10	エークラス　エイガスター　ウンドーシャツ エイプンタイプ　イロチョーク	3	インクスタンド　アイシャドー　オーバーシューズ
	B濁	2	アカゲット　インドザラサ(インドサラサの項)	0	
2.一形態素の漢語	A清	28	ウンドーカイ　アキサク　エックスセン イコクフー　イトヘン	0	
	B濁	4	イッポンギ　ウイザン　イモバン　オーゾン	0	
3.熟　語	A清	78	イッパンカイケイ　ウマレコキョー　アトシマツ エイギョーテイシ　エイヨーフリョー	34	イドバタカイギ　インサツコーバ　エイヨーショーガイ　インドテツガク　アソビハンブン
	B濁	29	エイリガイシャ　アオジャシン　ウチワダイコ イリドーフ　ウワビョーシ	0	
4.漢数詞	A清	3	イズシチトー　オーミハッケイ　エイジハッポー	0	
	B濁	0		0	
5.略　語	A清	5	イチコー　ウンキュー　イセン　インテン　アルチュー	0	
	B濁	0		0	
I.[X(従属)-名]名	A清	51	ウチカクシ　アンゼンカミソリ　アシサキ イキチ　アゴヒモ	64	アシクビ　エンマコーロギ　アオスジ イリタマゴ　エハガキ
	B濁	182	アマガエル　ウメズ　イシダタミ　イノチズナ エノクバコ	0	
II.[名-(対等)-名]名	A清	19	アチラコチラ　ウエシタ　ウチソト　イロツヤ エダハ	0	
	B濁	1	アシデマトイ(アシテマトイの項)	0	
III.[名(目的語)-他動]名	A清	17	イネカリ　イヌコロシ　アブラサシ　ウソツキ イモホリ	9	ウタクラベ　エンピツケズリ　アナサガシ イキツギ　アナフサギ
	B濁	29	アオタガイ　アシゴシラエ　エリドメ イノチビロイ　ウメボシ	0	

Ⅳ.[X(修飾語,主語)-動]名	A清	6	イヌカキ　ウデキキ　ウワシキ　オカシラツキ オーハラエ(オーハライ)	15	アネサンカブリ　アラケズリ　イチジシノギ オカドチガイ　アテハズレ
	B濁	68	アトガキ　イキギレ　イヌジニ　アブラズケ ウグイスバリ	0	
Ⅴ.[動(従属)-動]名	A清	20	イレカワリ　オイコシ　イスワリ　ウエツケ アライハリ	7	イキスギ　イレチガイ　ウリツナギ オイハギ　アケヒロゲ
	B濁	26	ウリグイ　アライザラシ　イキダオレ イリビタリ　ウキボリ	0	
Ⅵ.[動-(対等)-動]名	A清	9	ウリカイ　イキキ　アタリサワリ　アケタテ オキフシ	4	アガリサガリ　アゲサゲ　ウキシズミ アタリハズレ
	B濁	0		0	
Ⅶ.[X(非動)-動]動	A清	2	イキセキキル　ウワツク	0	
	B濁	17	ウラガエス　ウワズル　イキズマル　アイテドル ウヌボレル	0	
Ⅷ.[動-動]動	A清	49	オイコス　イスクメル　オガミタオス ウツシトル　アレハテル	11	ウチクダク　イーシブル　オースギル ウケツグ　ウリトバス
	B濁	3	イキドマル　イケドル　イリビタル	0	
Ⅸ.[X(非形)-形]形	A清	7	イジキタナイ　アセクサイ　ウスラサムイ ウズタカイ　オクフカイ	1	ウラサビシイ
	B濁	6	オカシガタイ　ウシログライ　イキグルシイ エンドーイ　エンリョブカイ	0	
Ⅹ.[形-形]形	A清	3	ウスキミワルイ　アオクサイ　アツクルシイ	0	
	B濁	5	ウスギタナイ　ウスグライ　アオグロイ アオジロイ　アマズッパイ	0	
Ⅺ.[名(主語)-形]名/形動	A清	0		0	
	B濁	5	アシガル　イログロ　ウラジロ　エンダカ アシバヤ	0	
Ⅻ. その他	A清	11	アレクライ　イチコロ　イマサラ　アリタケ　ウッテツケ	0	
	B濁	8	アレグライ　イマゴロ　アソビズキ　アシダ　アキハバラ	0	

5. 合成語の前後部の頭をとってつないだ略語（出た例はすべて連濁しない合成語から作られた略語）。

I 以下　後部要素が和語（「和語＋漢語」という構成の合成語を含む）のもの。ローマ数字は文法的構造による分類。たとえば $[X-名]_{名}$ は“前部要素は不定，後部要素は名詞で，合成語全体は名詞”の意。A は連濁しないもの，B は連濁するもの。

表記法は『明解日本語アクセント辞典』に従う。これはふつうのかなづかいとは異なり，長音は「ー」で表わしてある。ただし ei, ee の二通りの発音があるものはエイ，セイ等で表わしてある（辞典ではエイ★，セイ★のように「★」つけて示してあるがここではこの印は省略する）。またチジミ，ツズキ，アサジエ，イノチズナのように，「ぢ」「づ」はジ，ズで表わしある。これは同じ音を同じ文字で表わすために，/zi/ をジで，/zu/ をズで表わしてあるわけである。つまりこのかたかな表記は，ローマ字による音素表記の代用である。ローマ字音素表記のほうがすっきりしてよい面もあるが，日本人にとってはかな表記のほうがパッと見てわかるという利点があるので，ここではかな表記を使った。

最初にことわったように，この資料は全体から見ればごく一部であるから，これだけで最終的な結論を出すということはもちろんできない。しかし「大数の法則」によって，全体的な大きな傾向はこれで十分わかるものと考えられる。

§4. 資料の吟味

こうして資料をある基準によって分けてまとめて見ると，一つ一つの合成語をバラバラに見ていたのでははっきりわからないことが，いろいろわかってくる。

まず音韻的条件が一目でわかる。後部要素の第二音節に濁音 (ŋ, z, d, b) があるものは連濁しないらしいという見当がついている（§2 の a）ので，これが当たっているかどうかをチェックし，同時に §2 の a で疑問として

おいた第三音節あるいはそれ以下に濁音がある場合のことも調べてみる。表を見ると，後部要素の第二音節以下に濁音を持つものはすべて連濁しないAグループの中にある。このことはとりもなおさず第二音節以下に濁音を持つものは合成語の後部要素となっても第一子音が濁ることがない，すなわち連濁しないということにほかならない。こうして，最初の仮説（§の2a）が正しいらしいことがわかったわけである。実際の数をあげると：

第二音節・第二モーラが濁音のもの	92
第一音節が長い音節（長音，促音，撥音を持つもの）で，第二音節・第三モーラが濁音のもの	28
第三音節が濁音のもの	22
計	142

（後部要素の異なり語数。延べ語数すなわち合成語の数で言うと197。）

これはこの資料全体の1割強に当たる。これだけのものが，文法的条件や語彙的条件を待つまでもなく，音韻的条件によって，連濁しないことが自動的に決まってしまっている，というわけである。具体例で言うと，インクスタンドのスがズにならないのは，次に述べるように外来語だからと言えるけれども，しかし仮に日本古来の語でこれと同じ語形を持つものがあったとしたら，やはり連濁しないであろうということが予測されるわけである。

ここで，連濁を阻止する音韻的条件を文字化しておく。

規則1　後部要素の第二音節以下に濁音（g～ŋ, z, d, b）があるときは連濁しない。

これは調べた結果わかったことだから「結論」と言ってもよさそうに思えるが，実はこれもまだ仮説である。第二音節以下と言っても，いままでの資料に出て来たのは第三音節までの濁音で，第四音節以下に濁音のあるものが今後出て来たらどうなるかわからないし，そのほかなんらかの反証例が出て来たらこの仮説はまた修正しなければならないからである。

次にリストの1番と2番を見ると，外来語は連濁しないという仮説（§2のd）がどうやら当たっているらしいということがわかる。外来語で連濁しているものはアカゲット，インドザラサの二語だけだがインドザラサはインドサラサの項目のうしろ側に出ているにすぎず，アカゲットにしろインドザラサにしろ外来語とは言っても妙なもので，少なくとも現在ふつうに使われていることばではない。現在よく使われるタオルケットという合成語においてはケットは連濁しない。そのほか英文タイプ，色チョーク，赤チョーク，白チョーク，板チョコなど，漢語と外来語，和語と外来語が結合してできた合成語でもみな連濁していない。さらに［X－外来語］のXのところに何かを入れて臨時に合成語を作る場合，たとえばナガイとチョークを結合させて臨時的に合成語を作るとすればこれはナガチョークとなって，決してナガジョークとはならないのである。従って連濁している二語は特殊な例外と考えられ（例外となっている原因は「和語扱いされるほど和語にとけこんでいる――これらの語が作られた時期に，和語にとけこんでいた」ということであろうが，原因追求にはいま深入りしない），次の仮説的規則を立てることができる：

規則2　後部要素が外来語である場合は連濁しない。

この規則の当てはまる語の数（後部要素の異なり語数）は10，当てはまらないのが2である。これはもちろん規則1（音韻的条件）によって機械的に決まるものを除いた数である。

リストの3番～7番を見ると，§2のeの「漢語は連濁しにくく，特に後部が漢数詞の場合は連濁しない」という見当は当たっているらしく思われる。これを文法的構造の点から見ると，［名－（対等）－名］$_{名}$という構造のもの（例：イショク《衣食》），［名（目的語）－他動］$_{名}$と見てよさそうなもの（例：エイギョーテイシ《営業停止》），［X（修飾語，主語）－動］$_{名}$に相当するもの（例：エーヨーフリョー）などが少数あるのを除けば大多数は［X（修飾語）－名］$_{名}$という構造になっている。一方このうちで連濁するものはすべて［X（修飾語）－名］$_{名}$という構造のものばかりである。［名－（対等）－

名]名のものは後で見るように和語でも連濁しないのだから，漢語が和語に比べて連濁しにくいことの証拠にはならないし，[名(目的語)-他動]名の構造のものも，和語でも連濁しないものがたくさんある上に，漢語の例は僅少であるから，漢語の連濁しにくさの証拠にはならない。そこで，[X(修飾語)-名]名という構造を持つものだけについて，後部要素が漢語のものと和語のものの連濁するものとしないものの数を比べてみると

後部要素		連濁しないもの	連濁するもの
漢語	1 形態素	26 } 98	4 } 31
	2 形態素以上	72	27
和語		51	182

となっていて，和語では連濁するものが3倍以上なのに対し漢語では連濁しないもののほうが約3倍となっている。従って

漢語は連濁しにくい。

ということが言えるわけである。特に後部要素が一形態素の漢語である場合は連濁するのはわずか 1/7 である。しかしいま見たように漢語でも連濁するものがあるから，どういうものが連濁するのか調べてみよう。

まず一形態素の漢語で連濁している例は：

サン：アトザン，ウイザン

ハン：イモバン

キ　：ウツリギ°，イッポンギ°

ソン：オーゾン

の4語だけである。まずお産の意味のサンは，漢字熟語の場合でもアンザン*，ソーザン*，ナンザン*，ハツザン*，シザン(シサンとも)*，ショザン(ショサンとも)*のようによくザンになる。産物とか，どこそこでとれる，できるという意味のサンは，コクサン*，アフリカサン*などの場合ばかりでなく，長音やンのあとでも，ホクオーサン*，スペインサン*のように，ザンにはならないが，お産の意味のサンはザンになる場合が多い。従って，

いま別問題だからと言って除外した熟語の扱いを受けたとしても，このサンはごく自然にザンになりやすいのではなかろうか。一方アトやウイのように和語の前部要素がついていることから和語扱いされていると見ても，やはり連濁するのが自然である。

イモバンは，わたくしはなんとなく《おいものはんこ》だと思っていたのだが，辞書を見ると木版の版という字が書いてある。これがイモバン，コンニャクバン*などで連濁するのが，和語化しているためと言えるかどうか，目下不明である。《はんこ》の意味のハンは，タイコバン*，メクラバン*のようにたいていバンになる。これはもう漢語ということが忘れられて，和語の中にすっかりとけこんでいると見てよいと思う。

ウツリギ°，イッポンギ°のキ《気》は，ウチキ，イヤキ，ウワキのように，ギ°にならない例もある。一方漢字熟語の場合は，デンキ*《電気》，クーキ*《空気》のように連濁しない場合が多いから，イッポンギ°やウツリギ°の場合はキ《気》が和語の中にとけこみかかっていて，[X－キ]という合成語の中で散発的に和語の規則が作用するのだろう。ギ°になるかどうかは音節数(あるいはモーラ数)に関係があるのではないかという気もするが，多くの例に当たってみなくてはなんとも言えない。

オーゾンのゾン《損》は，ホネオリゾン*，トラレゾン*，頭のサゲ°ゾン*等々，いくらでも合成語を作ることができ，いつも連濁するが，これは和語の中にすっかりとけこんでいると言える。

次に漢字熟語で連濁するものとしては

カイシャ：エイリガ°イシャ

カッセン：イシガ°ッセン

キンチャク：イソギ°ンチャク

ケンカ：ウチワゲ°ンカ，オーゲ°ンカ

サイク：アメザイク，ウメキザイク

シャクシ：アミジャクシ

ヒョーシ：ウワビョーシ

ヒョータン：アオビョータン
ケショー：アツゲ゜ショー，ウスゲ゜ショー
タイショー：アオダイショー
チエ：アサジエ，イレジエ
タイコ：イチバンダイコ，オーダイコ
カシ：ウチガ゜シ
ショーチュー：イモジョーチュー
トーフ：イリドーフ

その他で，29例(異なり語数)である。これらも大部分，もう漢語だという感じがなく，和語の中にすっかりとけこんでしまっていると言えそうである。連濁していないものの多くが，前部要素も漢語であるのに対して，連濁しているものはたいてい前部要素が和語であることも，このことの一つの現われと言えよう。そこで次のように言うことができる：

漢語でも和語の中にすっかりとけこんでいるものは和語の連濁規則の適用を受ける。

ところがここに一つ特別なものがある。すなわちエイリガ゜イシャ《営利会社》のカイシャである。カイシャ《会社》が合成語の後部要素になると，ボーエキガ゜イシャ*，ショージガ゜イシャ*，カブシキガ゜イシャ*，ユーゲ゜ンガ゜イシャ*のようにたいてい連濁する。カイケイ《会計》やカイワ《会話》が連濁しないのにカイシャ《会社》だけがどうして連濁するのだろうか。キンチャク，シャクシ，トーフ等々はたしかにもう漢語とは意識されないほど和語化していると感じられるが，カイシャはどうも漢語と感じられる。前部要素も漢語で，数多くの漢語の合成語と同じ[熟語－熟語]という構成になっている。それにもかかわらずカイシャに和語の連濁規則が当てはまるとすれば，この語が「連濁する」と語彙的に規定された特殊例であると言わなければならないだろう。すなわち：

漢語のうちのあるものは，和語の連濁規則の適用を受けることが語彙的に規定されている。

そして，これらのことから逆説的にわかるように，大部分の漢語は，和語ならば極めて連濁しやすいような環境にはいっても連濁しないのであるから，「漢数詞は連濁しない」ということは特に取り立てて言う必要はなく，

漢数詞を含めた大部分の漢語は和語の連濁規則の適用を受けない。

のように言うほうが妥当である。言うまでもなくいま取り扱っている範囲においての話であり，最初に断ったように熟語の連濁となると別である。

リストの8番はちょっと問題が別だが，いまのところ連濁している合成語の頭をとって結合した略語の例が出て来ていない。ここで言えることは§2の

連濁しない合成語は頭だけをとって結合した略語になっても連濁しない。

という見当が当たっているらしく見える，ということだけである。

さていよいよ今回の中心課題である和語の連濁規則の探求にはいる。§2で述べたように，資料集めの段階で「連濁の有無には文法構造が作用している」という見当がついているので，その観点から資料を分類し，検討してみる。

I. [X(従属)-名]名

後部要素が名詞で，前部要素がこれと従属的な関係で（つまり対等の関係ではなく）結合している合成名詞。この大部分は前部が後部を修飾する関係になっているが，前部要素が動詞のものの中にはイケバナ《花を生けること》のようなものもあり，またイレズミ《入れた墨》《墨を入れること》，オリガミ《折るための紙》《紙を折ること》のように二義あるものもある。いずれも同じ規則に支配されるのでここへいっしょに入れた。IB のグループを，前部要素が名詞のもの (IB-1)，形容詞のもの (IB-2) 動詞のもの (IB-3) と大まかに分けてみたのであるが，こうした前部要素の品詞は，連濁の有無にほとんど関係がないことがわかった。そこでこれらをひとまとめにして IA と IB の数を調べてみると，IA の 51 に対し IB は 182 で，連濁するものが圧倒的多数をしめている。そこで

規則 3　[X(従属)-名$_1$]$_{名2}$ という構造では 連濁が起こるほうが通則である。

と言えそうである。

しかし連濁しないものが $^1/_4$ 以上をしめていることも無視できない。そこでこの構造で連濁しないものにはどんなものがあるかを見てみる。まず

カミソリ：アンゼンカミソリ

テ ア テ：オーキューテアテ

の類は，後部がそれ自身合成語(両者とも[名(目的語)-他動]$_{名}$という構造で III A に相当する)で，前部要素はそれ自身独立して使われ得る熟語である。こういうものには 5 番の[熟語 - 熟語]という構造のものと同じような連濁しにくさがあるのではなかろうか。つまりこれらは前部と後部の合成語としての結びつきがゆるいのではないか。たとえばローマ字で分かち書きをするとき，イッパンカイケイの類と同様に，前部と後部の間にスペースをあけたりハイフンを入れたりすることが多いのは，結びつきのゆるさの表われではなかろうか。もっとも連濁しないことが原因で結びつきをゆるく感じさせるということもあるが。

テホン：エデホン，カナデホン*

などは，前後部の結びつきがそうかたいとも思われないが，連濁が起こっている。これには音節数も関係がありそうだし，また後部が，合成語だということがはっきりした合成語ではない(一語としてかたまっている)ということも関係があろう。

トケイ：カイチュードケイ*，ハッカクドケイ*

などでは，前部と後部の関係がゆるい点はオーキューテアテの類と同じなのに連濁が起こる。しかしトケイも合成語だということがはっきりした合成語ではない(一語としてかたまっている)点，オーキューテアテの類とは違う。因みにトケイは最初の序説の部分で述べたように，この構造の中ではいつも連濁する。アンゼンカミソリ，オーキューテアテの類と似た構造で連濁しない例としてはほかに

カミキリ：ヒゲナガカミキリ*

ツユクサ：ムラサキツユクサ*

などがある。資料をふやして調べないとはっきりしたことは言えないが，「[多音節語－合成語] という構造では連濁が起こりにくい」というようなことではないかと推測される。

次に，

カクシ：ウチカクシ

は，後部が動詞から来た名詞である点特殊で，一般化して語ることはできない。次に

カス：アゲカス，アブラカス，ウオカス

カセ：アシカセ，クビカセ*，テカセ*

サキ：アカリサキ，アシサキ，アテサキ，イキサキ，イテンサキ，ウリサキ，ウレサキ，エンサキ，オイサキ，オクリサキ

ツチ：アカツチ，アレツチ*，クロツチ*，ネバツチ*

ヒメ：ウタヒメ，オトヒメ，シンデレラヒメ*，ツバキヒメ*

ヒモ：アサヒモ，ウチヒモ，クツヒモ*，クミヒモ*，コシヒモ*

のカス，カセ，サキ《先》，ツチ《土》ヒメ《姫》，ヒモ《紐》は，この構造の中でも常に連濁しない。長崎のサキは連濁することもよくあるが，サキ《先》は常に清音で出て来る(反復の場合はサキザキとなるが本論とは別である)。金槌，木槌のツチは連濁するがツチ《土》は連濁しない。これらは語彙的に「連濁しない」と決まっているものと言うほかはない。

コ《粉》：アオコ，アライコ，イシコ，イリコ，ウチコ，ウドンコ

のコ《粉》は，特別の場合を除き合成語の中にしか現われないものだが，これも連濁しないことに決まっている。同音でもコ《子》はよく連濁する。

テ《人》：ウタイテ，ウリテ，キキテ*，ハナシテ*

は連濁しない。しかし同じ「手」という漢字で書かれる語でもテ《手》は

ヒダリテ，ミギテのように連濁しない場合もあり，またウシロデのように連濁する場合もある。

カタ《方法》: イーカタ，イキカタ

のようにカタ《方法》は連濁しない。しかしカタ《形》やカタ《タイプ》は，オーギガタ，ウルサガタのようにいつも(でないとすればたいてい)連濁する。もっともカタ《方法》は接尾辞であるから別に扱うべきかもしれない。

とにかく以上のことから

和語の名詞のあるものは連濁しないことが語彙的に決まっている。

と言うことができる。

このように常に連濁しないものと，この構造では常に(あるいはほとんど常に)連濁するもの(これが圧倒的多数をしめる。例: カオ，ハコ，トケイ)のほかに，場合によって連濁したりしなかったりするものもある。

カワ《皮，革》: アマカワ，ウスカワ，ギューカワ*，ブタカワ*
アカガワ，シカガワ*，ワニガワ*

カワ《川》: アベカワ，アラカワ，オーカワ，アサヒカワ
アブクマガワ，アマゾンガワ，アマノガワ，
イシカリガワ，ウジガワ，エダガワ，エドガワ

の例で，なぜブタのカワは濁らずワニのカワは濁るのか，なぜ安倍川のカワは濁らず江戸川のカワは濁るのか。何らかの歴史的な原因があってそうなったのであろうが，現代語の体系の中で規則を立ててこれを説明することはできない。ただ，河川のカワの場合，カワはいくつかの決まった河川名にのみ現われ，ガワのほうはまったく生産的 productive である。たとえば外国の河川名を表わすにはふつうアマゾンガワ，ミシシッピーガワ，ラインガワ，セーヌガワ，テネシーガワ，アムールガワのように，原名にガワをつけて表わすし，新しく人工的に作られた河川に名をつけるときも…ガワとつける。従って，アベカワ，アラカワのような決まった特殊例を除いては，カワ《河川》は常に連濁するカオやハコのグループにはい

るわけである。

II. [名 - (対等) - 名]名

前部も後部も名詞で，両者が並列的にあるいは対立的に，対等の資格で結びついているものである。

こういう構造では，漢語であれ和語であれ連濁していない。従って

規則 4：前後の名詞が対等で，並列的あるいは対立的に結合してできている合成名詞では連濁が起こらない。

という規則を立てることができる。ただ一つ例外的に連濁しているのがアシデマトイというより大きい合成語の前部要素になっているアシデの部分である。もっとも『明解日本語アクセント辞典』ではアシデマトイはアシテマトイという項目の後のほうに置いてあり，凡例によると慣用または望ましいほうを先に置いてあるということなので，アシテマトイのほうが慣用または望ましい形，アシデマトイのほうはあまり使われないか，あまり望ましくないほうの形，ということになる。それにしても，アシデは独立の名詞としては用いられず，アシデマトイ全体としてすっかり固まってしまっているのであるから，これはアシコシやアメツユなどと同じではなくても驚くにはあたらない。

III. [名(目的語) - 他動]名

前後の要素が直接目的語と他動詞という関係になっていて，全体が«N を V すること»«N を V する人，もの»«それで N を V するためのもの，道具» などという意味の合成名詞を作っているものである。§2 で述べたように，この構造では連濁が起こらないかあるいは起こりにくいと言われており，わたくしもカードをとっているときは，そういう印象を受けたのであったが，一方連濁が起こっている例も次々に出て来て，数をとってみると A (連濁しないもの) 17 に対し，B (連濁しているもの) 29 (いずれも後部要素の異なり語数) となっていて，かえって連濁している例のほうが多いのである。ところが一つ一つの合成語をよく見てみると，A グループは，«N を V すること，もの，ひと» とかそれに使う道具とかをズバリ表わしており，

「目的語と他動詞」という関係がはっきりしているのに対し，B グループの多くは，前部が後部の直接目的語に相当するように見えても実はむしろ修飾的であったり，あるいは合成名詞が一語としてすっかり固まっていて，«A を B すること，もの，人，道具» という意味の上にさらに何か加わって比喩的な使い方になっていたりする。たとえばアオタガイは «青田を買うこと» を直接的に表わしているのではなく，«青田の状態で(米を)買うこと» ないしはそのような人の採用のやり方を表わす。これに対して «何かを買うこと» という意味を直接的に表わす場合は，ヒトカイ*，ヤスモノカイ*のように連濁しないほうがふつうのようである。アオタガイとヤスモノカイは，一見どちらも [[形－名]名－他動]名という同じ構造を持っているように見えるけれども，ヤスモノカイはアオタガイとは違って，«安い状態で何かを買うこと»ではなく，«安物を買うこと» である。固有名詞のアマノハシダテにおけるハシダテでは連濁が起こっているけれども，実際に «何かを立てるもの，道具» をズバリ表わすハシタテ*，カサタテ*，ホンタテ*では連濁が起こらない。「上目使いに見る」という場合に使われるウワメズカイや，«何かの使い方» を表わすカナズカイ*，カネズカイ*，ヒトズカイ*，ユビズカイ*などでは連濁が起こるが «何かを使う人» を表わすマホーツカイ*，テジナツカイ*，ニンギョーツカイ*，ヘビツカイ* では連濁が起こらない。命がかろうじて助かることを比喩的に表現するイノチビロイでは連濁が起こるが実際に «何かを拾うこと» を表わすクリヒロイ*，オチボヒロイ*，タキギヒロイ*などでは連濁が起こらない。そして，石でもごみでも紙くずでもどんぐりでも何でも，«…を拾うこと» という意味を表わすのに，こういう語にヒロイをつけてイシヒロイ*，ゴミヒロイ*，カミクズヒロイ*，ドングリヒロイ*というふうに合成することができる。足を交互に踏んで歩くようなかっこうをするが1ヵ所にいて進まないことを表わすアシブミでは連濁が起こっているが，これは «足を踏むこと» ではなくむしろ «足で踏むこと»，つまり前部要素は後部要素の修飾語であろう。これに対し実際に何かを踏むことを表わ

すカゲフミ*，ムギフミ*では連濁が起こらない。梅を干して漬けて作った食べ物のウメボシでは連濁が起こっているが《何かを干すこと，もの，道具》を表わすフトンホシ*，モノホシ*，コモノホシ*，オムツホシ*では連濁が起こらない。結局

規則5：《N を V すること，もの・人，道具》という意味を直接的に表わす合成名詞［名(目的語)-他動］名では連濁が起こらないのが通則である。

と言うことができる。そしてこれにさらに比喩的意味が加わって全体として固まっているものには連濁が起こっているものが多い，と言えるようである。

ただ，B グループの中にも，A グループと同じくらいはっきりと《N を V すること，もの・人，道具》という意味を表わすものが少数ある。

変える → ガエ：イドガエ，ヘヤガエ*，バショガエ*，シューシガエ*

返す → ガエシ：イシュガエシ，オンガエシ*

乞う → ゴイ　：アマゴイ，イノチゴイ，モノゴイ*

好む → ゴノミ：イショーゴノミ，イロゴノミ

試す → ダメシ：ウデダメシ，ウンダメシ，キモダメシ*，チカラダメシ*

止める → ドメ：アシドメ，イタミドメ，オビドメ*，クツシタドメ*，クルマドメ*

これらは，この型の合成名詞の後部要素となるとき常に(あるいはほとんど常に)連濁するのであり，従って規則5のただし書きとして

ある他動詞はこの構造で連濁することが語彙的に決まっている。

と言うことができる。

IV.　［X (修飾語，主語)-動］名

後部要素が動詞で，前部要素がこれに修飾語あるいは主語の関係で結合しているものである。修飾語の関係のものが多い。

A グループ(連濁しないもの)はいまのところイヌカキ，アトクサレ，ウデキキ，ウワシキ，オカシラツキ，オーハラエの6例だけであるが，B グ

ループ(連濁するもの)は68例(後部要素の異なり語数)ある。これだけ極端な差があれば

規則7: [X(修飾語，主語)-動]名では通常連濁が起こる。

と言って全然さしつかえない。

例外的にAになっているものをちょっと見てみると，カキ，キキ，クサレ，ハラエなどは，あまりほかの合成語の中には現われない特殊なものであるから，一般的な通則と違った，この語だけの単発の規則があってもどうと言うことはない。シキ，ツキなどは，ほかの合成語の中にも出て来る形式だが，シキはウワシキの中では連濁しなくてもシタジキ*の中では連濁しているから，「連濁しない」と語彙的に決まっているのでないことは明らかである。なぜ上に敷くもののときは濁らず下に敷くもののときは濁るのか，説明がつかない。単発の特殊例としか言いようがない。オカシラツキのツキはほかにもイタツキ，イワクツキなどでも連濁しておらず，いまのところ連濁している例は出ていない。語彙的に決まったものかもしれない。アシツキのツキも，カオツキ*，カラダツキ*，テツキ*，メツキ*など，いつも連濁しないで出て来るから，語彙的に決まっていると言える。しかし考えてみると，これらの例の…ツキは，足や手や顔がついているというわけではなく，従って[X(修飾語，主語)-動]名というはっきりした構造はここにはもはや生きていない。単に「…ツキ」という語構成のパターンがあるにすぎず，このツキは接尾辞に準じて考えることができるかもしれない。

V. [動(従属)-動]名

前部後部とも動詞で，両者が対等ではない関係で結合しているものであるが，前部要素が接頭辞的で後部要素が主になっているもの(例：ウチキリ)や，前部要素がはっきりした動詞で後部要素のほうが接尾辞的であるもの(例：ウミタテ)など，いろいろある。もっと資料をふやしてから整理してみないと，この雑多なものから規則を引き出すことはできない。数はABほぼ半々である。

VI. [動 - (対等) - 動]名

前部・後部とも動詞で，両者が対等の資格で並列的にあるいは対立的に並べられているもので，名詞で言えば II に相当する。名詞の場合も連濁しないが，動詞の場合も，100% 連濁しない。規則 4 の「名詞」を「動詞」と言いかえればそれがそのままこれに当てはまる。

VII と VIII は合成動詞である。

VII. [X (非動) - 動]動

後部要素は動詞，前部要素は動詞以外のもので，主語，目的語，連用修飾語などいろいろな関係で後部の動詞と結合している。A グループ(連濁しないもの)はイキセキキル，ウワツクの 2 例だけで，2 例ともまったく特殊なもの，B グループ(連濁するもの)は 17 例ある。従って

規則 7: [X (非動) - 動]動では連濁が起こる。

と言える。

VIII. [動 - 動]動

前部・後部とも動詞の合成動詞である。意味の関係は «V_1 して V_2 する» «V_1 することを V_2 する»，その他いろいろさまざまであるが，区別なく A グループ (連濁しないもの) が圧倒的多数をしめており，B はイリビタル，イケドル，イキドマルの 3 例にすぎない。従って

規則 8: [動-動]動という合成動詞では通常連濁が起こらない。

と言うことができる。

IX 以下は後部要素が形容詞のものであるが，まだ例が少なすぎて整理ができず，雑然としている。

IX. [X (非形) - 形]形

前部要素が形容詞以外のものだが二要素間の関係はさまざまである。連濁するものとしないものがほぼ半々となっている。

X. [形 - 形]形

前後部とも形容詞のもので連濁するものもしないものもわずかずつあるが，«A_1 くて A_2» という関係のものは 3 例とも連濁している。他は二要

素間の関係がいろいろなので，IX のグループとともに整理しなおさないと何とも言えない。

XI. [名(主語)-形]名/形動

前部が名詞，後部が形容詞で主語・述語の関係をなし，全体が名詞または形容動詞になっているもの。7例が7例とも連濁しているから，これには意味があるものと思われる。それにしても IX 以下は例がふえるまで規則を立てることはさしひかえたい。

最後に

XII. そ の 他

がある21が，これは上のどの型にもあてはまらない雑多なものである。しかしこの中にもアソビズキのズキのように生産的なものもある。「…好き」はコドモズキ，オトコズキ，サケズキ，アマイモノズキなど，なかなか生産的である。「…嫌い」もオトコギライ，ヒトギライからクワズギライなどまである。こういったものも，まだ資料をふやして整理すれば，何か規則が出て来るものと思う。

§5. 今後の見通し

何と言ってもまだ全体の1割強の資料しか使っていないので，全般的な大きな傾向がわかったとは言うものの，細かい点になると後日にゆずらねばならない。今後資料をふやして不確かな点を解明し，結論へ持って行かなければならないわけである。たとえば V の [動(従属)-動]名という構造のものでは，連濁が起こらないものと起こるものとがほぼ同数で，その差異がどこから来るかはいまのところ不明である。

これについてわたくしはいま，ちょっと大胆だと言われるかもしれないが，ある予測を持っている。というのは，VA すなわち [動(従属)-動]名で連濁が起こらないものの大部分は，VIII の [動-動]動という構造の動詞が名詞化されたものではないか，すなわち[[動-動]動]名という内部構造を持っているのではなかろうか。たとえばイーカエは，まず「言う」と「変え

る」が結合してイーカエル「言い変える」という VIII の構造の合成動詞ができ，これが名詞化されたものではないかと思う。VIII は連濁を起こさないのが通則だから，こう解釈すればイーカエで連濁が起こらないのは当然ということになる。これに対し VB すなわち[動－動]名で連濁が起こっているものの少なくとも一部は，これとは内部構造が違うのではないか。たとえばウキボリはあるがウキホルという合成動詞はない。「浮き彫り」は《浮いた状態に彫ること》であって，前部は後部に対して修飾語的な関係に立っている。

さらに VIIIB すなわち [動－動]動のうち連濁が起こっているものの中には，この VB の合成名詞が動詞化された，つまり合成名詞が作られる段階ですでに連濁が起こっていて，それがそのまま動詞化されたために濁っている，というものがあるのではないかと思う。たとえばイキドマルは，まず「行く」と「止まる」が結合してイキドマリという VB の合成名詞ができ，それがそのまま動詞化したために濁っているのではないか。すなわちイキドマルは [[動－動]名]動という内部構造を持っているのではないかと思う。

このように「内部構造」という見方で見てみると，たとえば III B の中の一部にも，ひょっとすると [名－[動]名]名という構造のものがありはしないかとも考えられる。たとえばアマゴイは，まず「乞う」が名詞化されてコイとなってからアメとこれが結合してできた，と見ることはできないだろうか。前部の名詞が後部の名詞に従属的にかかるのは I の構造であり，そこでは連濁が起こるほうが通則であるから，もし III B の中にこういう構造のものがあるとすれば，そこで連濁が起こるのは特殊例でも何でもないことになる。

ここまで行くとちょっと行きすぎかもしれないが，しかしこのように表面が同じでも内部構造がいろいろ違う場合があるということを考えながらやると，いろいろおもしろい問題が出て来るものである。

◇　　◇　　◇

母音交替

合成語の前部要素の末尾の母音が交替する例にふれておく。i と o の交替(キに対しコダチ，コノハ)，i と u の交替(ツキに対しホシズクヨ)などもあるが，e と a の交替が数も最も多いし生産的でもある。

アメ《雨》は合成語の前部要素となったとき，アメのままの場合とアマになる場合とある。『明解日本語アクセント辞典』に出て来た数で言うと，アマとなっているほうが倍以上もある。天という字を書くアメも，アマになる場合がある。ところがアメ《飴》は，常にアメであって，アマになることはない。つまり，この種の母音交替をするかしないかは，語彙的に決まっている。もちろん歴史的には原因があるわけだが，現代語の体系の中では語彙的に決まっているとしか言えないのである。それでは，母音交替をするものにつき，どういう条件のときに交替するかあるいはしないかを，調べてみよう。

1. 雨：アメ/アマ

   アメアガリ(アマアガリとも)アメアラレ，アメカゼ，アメカ°チ，アメツズキ，アメツユ，アメフリ，アメモヨー，アメモヨイ

   アマアシ，アマオーイ，アマオチ，アマオト，アマガ°イトー，アマガ°エル，アマガ°サ，アマガ°ッパ，アマギ°，アマグ°ツ，アマグ°モ，アマケ，アマコ°イ，アマジミ，アマド，アマミズ，アマモヨイ，アマモヨー，アマモリ，アマヤドリ，アマヤミ，アマヨ，アマヨケ

2. 天：アメ/アマ

   アメツチ，アメノ...(アマノ...の項)

   アマテラス・オーミカミ，アマノ...(アメノ...とも)，アマノガ°ワ，アマノジャク

3. 飴：アメ

   アメイロ，アメウシ，アメウリ，アメザイク，アメダマ，アメニ，アメヤ

4. 稲：イネ/イナ

   イネカリ，イネコキ

   イナサク，イナズマ，イナダ，イナビカリ，イナホ，イナムラ

5. 上：ウエ/ウワ

ウエサマ，ウエシタ，ウエダ［(地，姓)］，ウエツガタ，ウエノ［(地)］

ウワアゴ°，ウワエ，ウワエダ，ウワエリ，ウワオーイ，ウワオキ，ウワテ，ウワヌリ，ウワノソラ，ウワバ，ウワバキ，ウワバリ，ウワビョーシ，ウワベ，ウワマエ，ウワマブタ，ウワマワル，ウワムキ，ウワムク，ウワメ，ウワヤ，ウワヤク

まずいちばんはっきりしているのがアメアラレ，アメカゼ，アメツユのように，前後の要素が並列的あるいは対立的に，対等の資格で結合している場合で，こういう場合は交替が起こらない。5番のウエシタも同じである。

次にアメガ°チのガ°チ，ウエサマのサマは，接尾辞である。接尾辞に対する語幹のときは交替しない。

アメアガ°リは「雨が上がる」のであるから［主語－述語］の関係，アメツズキもアメフリも同様である。では主語のときは交替しないのかなと思って見ると，アマモリ，アマヤミのように交替している例もある。なぜ「降る」ほうはアメで「やむ」ほうはアマなのか説明ができない。「あがる」場合はアメアガ°リとアマアガ°リの両方ある。

アメモヨー，アメモヨイは［名－名］名という関係で，前部が後部を修飾しているようでもあるが，しかしはっきりした修飾被修飾の関係ではない。モヨー，モヨイは接尾辞のような感じでもある。アメモヨー，アメモヨイに対してアマモヨー，アマモヨイもある。

アマ…というのはたくさんあるが，ほとんどが修飾・被修飾の関係になっている。そこで，だいたいにおいては，前部が後部を修飾する場合はアマ…となる，と言えるのではないかと思われる。

4番のイネ《稲》を見ると，交替のないイネカリ，イネコキは［名(目的語)－他動］名という関係であり，交替してイナ…となるほうは前部が後部を修飾する場合である。

5番のウエ《上》も，交替してウワ…となっているものの大部分は前部が後部を修飾している場合である。

まだごく大ざっぱなことしか言えないけれども，

(1) 前・後部が対等の資格で結合している合成名詞では交替が起こらない。

(2) 後部が他動詞で前部がその目的語，という関係の合成名詞では交替の起こらないことが多い。

(3) 前部が後部を修飾するときは交替の起こることが多い。

と言えそうである。

ここで，この三つの条件が連濁の有無に関してどうだったかを思い出してみよう。

(1) 前・後部が対等の資格で結合している場合は連濁が起こらない。

(2) 後部が他動詞で前部がその目的語のときは連濁の起こらないことが多い。

(3) 前部が後部を修飾するときは連濁の起こることが多い。

ということであった。すなわち母音交替の条件と連濁の条件とに平行性が見られるのである。これはまことにおもしろいことだが，こういうことも，調査をして整理してみてはじめてわかることの一つである。

付　記

その後『明解日本語アクセント辞典』の終わりまで資料を拡大した結果，いくつかの事実が判明した。いずれ稿を改めて論じることにするが，とりあえず次の点を指摘しておく．

(1) p. 125 の規則 1 に関して。

次の二つ(のべ 3 語)の例外がある：ワビデカ°ミ，ダンバシコ°，ナワバシコ°。

(2) p. 126 の規則 2 に関して。

次の一例外を追加する：ハンコ°ート

(3) p. 128 の「版」に関して。

連濁しないものは次の 3 語：カイハン，キューハン(以上熟語)，クミハン。

連濁しているものは次の 9 語：カイテイバン，カツジバン，カワラバン，ゴーカバン，コンニャクバン，ケッテイバン，ゲンショクバン，ゲンテイバン，ポケットバン。

(4) 同じく「判」«はんこ» に関して。

連濁しないものが 2 例ある：カキハン，ワリハン。

(5) p. 129 の，和語の連濁規則の適用を受ける漢語に関して。

漢語で常にあるいはほとんど常に和語同様に連濁するものは 75 例。その中で pp. 127 f. にあげたもの以外の，語例の多いものをあげると：ケイコ，ヂタ，シシ，チャワン，チョーチン，テッポー，トーロー，ヒョーシ（拍子），フシン，フトン，ホーコー。

(6) p. 131 の規則 3 に対する例外に関して。

常にあるいはほとんど常に連濁しないものが，pp. 131～133 にあげたもののほかに約 60 例ある。このうち［多音節語—合成語］という構造にはいるものは次の 13 例：クミアイ，ケムシ，コマツ，サシモノ，ツナミ，ツメクサ，ツワモノ，テオチ，テハイ，トノサマ，トリクミ，トリヒキ，ハチマキ。固有名詞 3 例：コマチ，シマネ，タロー。語彙的に決まっていると考えられるもの 45 例：カ（蚊），カサ（蓋），カタチ，カラクリ，カリ（雁），カンムリ，キタ，クレナイ，ケムリ，コイ（恋），サカキ，シオ（潮，汐），シタ（下），シモ（下），シロ（代），スキ（鋤），スケ，ススキ，スソ，スミ（隅），スミレ，セ，セワ，ソコヒ，タカ，タミ，チチ（父），チリメン，テンコ，ツユ（梅雨），ツユ（露），テコ，ト（砥），ハ（羽），ハシ（端），ハナ（端），ハハ，ハマ，ヒ（樋），ヒル，フ（斑），フトコロ，ホ，ホー（類），ホトリ。